卒業生紹介

国際的視野を育てる家庭科教育
～家庭科教育から社会に対してできること～

Kobori Kasumi
小堀　香純

横浜市立
中和田中学校
家庭科教諭

東京都出身
2008年　お茶の水女子大学生活科学部食物栄養学科卒業
2010年　同大学院人間文化創成科学研究科博士前期課程
　　ライフサイエンス専攻食品栄養科学コース修了
2010年～2013年　マレーシアのクアラルンプール日本人学校で勤務
2013年～2016年　横浜市の公立中学校で家庭科教員として勤務
2016年～　横浜市教員として採用

家庭科の教員になるまで

大学に在学していた時、ただ先生に勧められ、教員免許を取得しました。教師になりたかったというより、様々な視点から食品について学びたいという思いからの選択でした。

教育実習は忙しくも充実した実習でした。しかし、教師になろうという思いにはなりませんでした。もともと、食品会社に就職し、商品開発を通して、日本の食事情をよりよくしていきたいという思いが強かったためだと思います。しかし、実際、就職活動をし始め、様々な企業の説明を受ける中で、自分の思いと企業の考えの違いに戸惑いを感じるようになりました。企業が自社の商品を売るための商品開発ではなく、食の改善により強く興味を持つようになり、そのための教育の重要性を考えるようになりました。そこで、家庭科の教員になろう、と決めました。

日本人学校に勤めて

教員採用試験は終わっていたため、応募できる学校を探していたところで、日本人学校の教員という募集を見つけました。日本人学校とは、海外で働く日本人の家族のための学校であり、世界各地に日本人学校はあります。文部科学省が教員を日本人学校に派遣するのですが、ちょうどその時、人数が足らないため、一般からの教員募集を行っていたのです。すぐに応募しました。どの国に行くのか分からないまま、面接を受けた結果、私の赴任先はマレーシアのクアラルンプールに決まりました。大学院を出てすぐにマレーシアに移り、その後３年間をクアラルンプールの日本人学校で家庭科教諭として勤務しました。

文化の違いを感じることが好きだったり、周りのサポートもあったりと、初めて社会に出た不安や海外生活への戸惑いは、それほど感じずにすみました。

マレーシアは、マレーシア系、中国系、インド系の民族が暮らす国です。日本人学校へは両親のどちらかが日本人の場合に入学できるため、ハーフの子ども、マレーシアでしか生活したことのない子ども、日本から来たばかりの子どもなど、さまざまでした。

日本と同様の教育を、という目的をもつ日本人学校ですが、難しいこともありました。イスラム教徒の児童生徒がいるため、豚肉を使った調理や断食中の調理はできない。ゴミの分別がないため、ごみの捨て方の学習が難しい。自宅の周りの地域の様子を調べる学習をしたくても、治安上児童生徒だけで歩き回れないところも多く、宿題にできない、といったことです。反対に、海外だからこそできたことも多くありました。たとえば、民族衣装を着て登校する日があったり、マレーシアと日本の似たおやつを作って比べてみたり、世界の生活様式の違いを見て調べてみたり、現地校と交流して実際に体験的に文化を学んだり。大変なことも多かったですが、工夫次第でどんどん児童生徒の視野や考え方が広がってくる様子を、楽しく感じていました。

日本に帰ってきて

３年の任期を終え帰国し、横浜市の公立中学校で、産休や育休の代替教員である「臨時的任用職員」として勤務し始めました。そして、３年後、平成 28 年度４月から正規職員として横浜市で家庭科の教員として勤めることになりました。

日本では様々な研修も多く、様々なサポートを受けられたり相談ができたりすることから、自分の授業力や指導力に磨きをかけることができます。ただ、３年の海外での経験があったからこそできること、伝えられることも多いと感じています。衣食住の文化の違いといった家庭科の面では、実際の体験や写真、資料があることで、生徒の理解をより深められていると実感しています。また、異なる文化圏で生活して必要性を感じた、幅広い視野を持った生徒の育成にも力を入れています。自分と違うところを認められる、受け入れられるという国際的な幅広い視野を持つと、日本国内ではもちろん、世界に羽ばたき活躍する人に成長していけるのではないでしょうか。

家庭科教諭と家庭科教育

教員採用試験は年に１回、家庭科の募集は都道府県にもよりますが若干名、倍率は 10 倍～20 倍という狭き門です。採用試験を通過するのは大変ですが、家庭科の教員は女性が多く、産育休をとる方も多いので、常勤、非常勤であれば毎年仕事は必ずと言っていいほどあります。もちろん、正規教諭として雇用されることで、そういった保証がしっかり受けられるため、仕事も家庭も両立して考えられるのではないかと思います。

中学校家庭科の教育は現在、年間 87.5 時間と、我々が義務教育期間に受けていたよりもだいぶ減少しているという現状があります。便利なものも増え、たとえば、食分野でいうと、中食や外食産業が増えたことで、自炊しなくても生活できるようになってきてはいます。ただ、その中でどんな食事を選ぶかは、その人の生活や体調にも大きくかかわってくるため、成人前からの教育が重要になってくることと思います。

家庭科教育は生活する力そのものを育成する教科です。私はこれからも家庭科教育を通して、児童生徒の生活する力、生きる力を伸ばし、社会に貢献していくことのできる生徒の育成に携わりたいと考えています。

文責：基幹研究院自然科学系　教授
赤松　利恵

わたしのオフタイム

新しいところに出かけて様々な風景を見たり、現地ならではの食事を味わったりすることもあれば、自宅でお菓子や小物づくりをすることもあります。いろいろな体験すべてが生徒たちに伝えられるネタとなるのは、生活する力を伝える家庭科教育ならではと感じています。